

生死の苦海

『生死の苦海ほとりなし』とは、龍樹和讃の一句である。

この人生は生死の海である。そして生死するがゆえに、横にも豎にも、はてしなく苦海である。いつでもどこでも苦海である。現象界は一面は助け合う共同体であり、一面は永遠の闘争であり、弱肉強食である。それゆえに一切衆生海は苦海である。

「宗教のいらぬ社会を造ればいいではないか！」

ラジオから景氣のいい声が聞こえる。だが死を見つめて生きている者に、その声が何と聞こえるであろうか、それは一つのたわごと過ぎない。宗教をいらぬものにしてよとならば、我より死を取り去って頂きたい。それだけが人間にとって不可能である。死が無くなれば人間ほとんどの問題は無くなるのではないか。

「死なんか問題にする者は、問題にならないあほうだ。」

いくら何と言われても、私には死が来る。そしてそれが私のすべての問題である。馬鹿でも、あほうでも致し方がない。何と言われても弁解のことばがない。この死の前にはすべてが『無』であることにさめたものに宗教がある。

『宗教のいらぬ社会をつくる』、そんな声は、熱い声、力強い声ではあるが、高上がりした人間の、およそ私には縁遠い、狂信の声としか受け取れない。死はしかし、私の問題であるだけでなく、万人の問題であるかも知れぬ。

如来真実の教法は、我を『無の死』から救い、無の自覚において、光と力と喜びを与えて生老病死を超えしめ、死の前にもゆるぎなき、大願の船に乗托せしめて、人生の価値を転換し、無限の苦悩に随順せしめつつ、宿業のすべてをそのままに生かし、法界自然の大道に直入せしめて、我をして任運無作の法樂樂に、寂靜湛然、不可思議の喜びに安住せしめたもうではないか。

『生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば』

弥陀弘誓のふねのみぞ のせて必ずわたしける』

死の床にもなお、一貫の願を失わしめず、破滅なく、自暴自棄なく、呪詛なく、不平なく、不満なく、恐怖なく、不安なく、三毒煩惱は持ちながら障げられず、八万四千の妄念は起これども妨げられず、報恩謝徳の大作に永遠の今を安住せしめたもうではないか。

静かに正法によつて苦に徹し、愚悪に徹して、無有出離之縁と合掌すれば、身は本願大悲真実の大船上にあるを知るであろう。

誤つて小我の抜き手をきつて大苦海に出でてはならない。生・死するものよ。